

哲学・思想論分野への進級を考えている人のために

教員からのメッセージ

●はじめに…哲学する、ということ

哲学とはどういう営みなのか、ということこれから説明していきたい。だけど、そもそも哲学についてはいろんな誤解が蔓延している。だからここでは、哲学についての典型的な誤解を6つとりあげて、哲学はどのようなものでないのかという話をしようと思う。そうするなかで、哲学する(そう、「哲学」には動詞形がある!)とはどういうことであるのかということが、だんだんと見えてくるはずだ。

① 哲学とは世界観や人生観や価値観のことだ、という誤解

「哲学」という語には、「彼は彼なりの哲学を持っている」とか、「彼女には確固たる哲学がある」とかいった使い方があふ。こういう場合、「哲学」は、ある種の研究活動の名としてではなく、「世界観」「人生観」「価値観」などの総称として用いられている。言葉の拡張された用法というやつだ。いや、それはそれでかまわないんだよ。こういうことに不平を言うのは、「数学が得意じゃない人に対して計算高い人だなんていうのはおかしい!」と言い張ると同様にバカげている。

だけど、こういうのはあくまでも「哲学」という語の拡張された用法だということが、あんまり理解されていないのは困りものだ。世界観、人生観、価値観は信念の一種であって、これらを持つことそのものは、けっして哲学することじゃない。なぜなら、哲学するとは、特定の信念を持つことではなく、理詰めの考察を遂行することだからだ。

② ひたすら自力で考えるのが哲学だ、という誤解

たしかに、他人の考えたことをただ学ぶだけでは哲学にならない。いや、そんな作業はそもそも学問じゃない。(勉強ではあるかもね。) だけど、人間ひとりが自力で考えられることなんて、たかが知れている。どんな学問においても、基本文献や先行研究を踏まえ、他人の評価に耳を傾けてこそ、創造的な一歩を踏み出すことができるものだ。哲学はそういうものじゃないと思っている人は、哲学を学問ではなく、ある種の悟りみたいなものに到達するための方法とでもみなしているにちがいない。

③ 決着のつかない問題を考えるのが哲学だ、という誤解

この誤解は、かなり間が抜けている。だって、決着がつかないと分かっているのなら、考え始めるわけがないからね。ただし、哲学者はしばしば決着のつけ方が分からない問題について考えている、というのは本当だ。といっても、どんな学問の研究者だって、決着のつけ方が分からないいろんな問題について考えているものだ。その場合、研究者は決着のつけ方を探している。むしろ、哲学者だってそうだ。——もともと、哲学の場合、決着のつけ方が長いあいだ見つからない問題ってのが、けっこうある。というよりむしろ、哲学は、そういった厄介な問題の取り扱いの場として設置されているという側面を持っている。

④ 「いかに生きるべきか」を考えるのが哲学するということだ、という誤解

いや、「われわれはいかに生きるべきか」とか「善とは何か」といった問題を研究してる哲学者だって、もちろん、いるんだよ。だけど、そういう研究はあくまでも哲学の一部門で、「倫理学ethics」と呼ばれている。哲学にはこのほかに、そもそも世の中には何がどんなふうにあるのかということの研究する「存在論ontology」っていう部門と、知識を成り立たせる条件や仕組みを研究する「認識論epistemology」っていう部門があつて、教科書的には、これらが哲学の主要な三大部門だ。そして、あとは何についての研究であれ、今のところ(先のことは分からない!)これら三大部門のどれかから

む側面を持っていれば、多くの場合その研究は哲学に分類される。たとえば、存在論がらみ、認識論がらみの言語研究は、「言語学」ではなく「言語哲学」の研究と呼ばれるわけだ。ただ、こうした哲学諸領域と隣接する他の学問との間にはっきりした境界は無い。むしろ理論やアイデアの相互流入が盛んだったりする。まあ結局、学問の分類ってのはかなり便宜的なものなんだよ。

なお、哲学という概念の原産地は西洋だけど(「哲学」という日本語は、‘philosophy’の訳語として明治時代に入ってから作られたものだ)、存在論的問題、認識論的問題、倫理学的問題は、洋の東西を問わず、われわれ人間がおのずと見いだしてしまう普遍的な関心事だ。だから、のちに見るとおり、「中国の哲学」や「インドの哲学」についても、われわれは無理なく語るができる。

⑤ 現代に哲学者はいない、いるのは哲学者研究者だけだ、という誤解

わけ知り顔でこんなことを言う人がときどきいるけれど、これは二重に間違っている。第一に、大学の哲学教師で、昔の哲学者(あるいは特定の地域・時代・学派の哲学思想)ではなく哲学の部門や問題領域を看板に掲げてる人なんて、実際は珍しくもなともない。彼らは、倫理や存在や知識やなんだかんだについて、新しい問題や理論・仮説の提示を盛んに行っている。そういった昨今の主題ばかりを集めた本も、日々続々と刊行されている。本屋さんで探してみしてほしい。

そして第二に、哲学の古典を研究してる人たちは、「先哲のありがたいお言葉を現代人にお伝えせねば」なんて思ってるわけじゃない。彼らは、人間の考え方というやつを、できるかぎり広い文脈のもとで理解しようとしてるんだ。そういう探求の創造性と重要性を、どうか分かってほしい。たとえば、現代に(そして日本に)生きるあなたが半ば無自覚的に受け容れている考え方がどれほどのものなのかを見てとるには、そのルーツになってる考え方とか、また逆にすごく異質な考え方を視野に入れなきゃいけない。こうしたことを顧慮していない場合、人が自分の考え方に対して持つ信頼は、しばしば一種の妄信だ。しかも、自分が何を信じているのかさえろくに分かっていない。

⑥ 哲学の問題は深遠だ、という誤解

われわれ哲学の現場にいる人間をもっとも当惑させるのが、こういう誤解、というか先入観だ。なぜなら、哲学の重要な問いは、どちらかという素朴で単刀直入なものだから。たとえば、「行為の善し悪しは、人々がどう判断するかってことから独立に決まってるんだろうか?」とか、「霊だの魂だのって、あるんだろうか?」とか、「あることを単に信じてるのと、それを知ってるのとでは、どこがどう違うんだろう?」といった具合。(最初のは倫理学的な問い、二つ目は存在論的な問い、三つ目は認識論的な問いだ。)ただし、問いがシンプルだということは、解答もシンプルだということじゃない。こういう問いに対して提案された解答を理解するには、それなりの予備知識と論証のプロセスを追う技能が必要になってくる。もちろん、こういうことは、どんな学問だって同じだ。

さて、みなさんの中にも、以上に述べたような誤解をしていた人がけっこういると思う。そんな人は、今すぐ自分の誤解をきれいさっぱり払拭しておいてほしい。そして、誤解していた人もそうでない人も、この問いに答えてほしい——「哲学って何? 哲学するってどういうこと?」。…おっと。まだ教わってないから今は答えられない、なんて言わないようにね。答えるために必要な情報は、これまでの話の中から見つけ出せるはずだ。

< 篠原成彦 >

おすすめ図書 野矢茂樹 『哲学の謎』(講談社現代新書)
大森荘蔵 『流れとよどみ』(産業図書)

『平家物語』の冒頭を思い出してもらいたい。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、沙羅双樹の花の色、盛者必滅の理をあらはす、おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」って呪文のように暗記させられたあれね。ここに出る「諸行無常」は、仏教を他の宗教から区別する第一の旗印(法印)。それは、長い旅路の果てに、二本の沙羅の樹の間に横たわったブッダが弟子たちに残した臨終の言葉として、次のように示されている。



「すべての作られたもの(諸行)は消滅する。だからこそ、心を集中し、努力せよ」

なるほど、人間を構成する細胞は約七年で入れ替わるそうだし、今、お湯を注いだカップラーメンは三分たつと胃の中に消化され、バックアップに失敗したデータはサイバー空間の彼方に消滅してしまう。「永遠」なんて言葉は、彼女に愛を語るときだけ高頻度で使われるレトリックの一種であり、世の中を見渡せば、「無常」なもので満ち溢れている。そう考えると、「諸行無常」なんて、わざわざブッダに言われなくても、分かり切ったことだ、って思うよね。

では、「無常」とは「いつか壊れてゆくこと」ではなく、「今、この瞬間に消滅すること」だとしたらどうだろうか？今、君が見ている世界は、瞬間毎に消滅しては、新たに生成している。これは果たして自明なことだろうか。古代インドの仏教徒たちは、ブッダが残した「諸行無常」という命題を考え抜き、そこに、あらゆる持続を拒絶する「瞬間的消滅」(刹那滅、kṣaṇabhāṅga)という概念を見出だした。そして、この概念をめぐる議論の枠組みを用意したのが、七世紀に活躍したダルマキールティという哲学者だ。

彼の名前は一般にはほとんど知られていないけれども、インド・チベット仏教の伝統の中では、特別な位置を占めている。彼が構築した認識論・論理学の体系は、彼以降の仏教徒たちの哲学的考察の基盤となり、他学派との熾烈な論争の中でさらに洗練されていった。しばしば「インドには『哲学』はない」と言われることがあるが、そういう人にはぜひダルマキールティの著作を読んでもらいたい。とは言え、彼の著作は、サンスクリット語原典あるいはチベット語訳で伝えられているため、そこにアクセスするためには言語のハードルを超えなければならないし、日本語への翻訳も、まだまだ途上の段階にある。困ったね。でも、逆に言えば、それだけ未知の部分を含んだ思想なのだから、まさに大学で学ぶに相応しい対象と言えるかもしれない。

ともあれ、ダルマキールティは、大胆にも、「諸行無常」というブッダの言葉を論理学の対象として扱うことを主張した。つまり、私たちの推論能力を駆使すれば、この宗教的な命題を必然的なものとして理解できるってことだ。彼が提示する「諸行無常」の証明は、次のような形になる。

[大前提] およそ存在するものは瞬間的である。例えば壺のように。

[小前提] これらの作られたものは存在する。

[結論] それゆえに、これらのものは瞬間的である。

もし、「これは、『例えば壺のように』という変な部分を除けば、確かに、形式的には妥当な推論に

なっているけど、『あらゆるものは瞬間的である』ってことを証明しようとしているのに、それがいきなり前提にされているのは変じゃないの？」という疑問をもつ人がいれば、なかなか鋭い。でも、よく注意して見てもらいたい。ここで彼は、「作られたもの」を「存在するもの」と言い換えているよね。そして、この〈存在〉(sattva)という概念が、この証明の鍵なんだな。

ダルマキールティは、〈存在〉を「目的実現の能力をもつもの」と定義する。この世のあらゆる存在者はそれぞれの目的・意味 (artha) をもっている。椅子にせよ、机にせよ、パソコンにせよ、私たちの身の回りにある道具的な存在であれば、それらは私たちが使用するときにはじめてその目的を果たすのであり、それぞれの意味をもつ。同じように人間もそれぞれの目的に向かって努力をしているとき、はじめて「存在者」としての資格をもつ。なかなか厳しいね。じゃあ、目的もなくフラフラとしているような人は、「存在者」じゃないのか、と言われそう。定義をもう一度見てもらいたい。ここに「能力をもつ」とある。つまり、今はフラフラしていても、潜在的に、目的に向かう行為を行う能力を具えているのであれば、その人は「存在者」と言えるってわけだ。よかったね。



こうして、あらゆる存在者は、相互に〈目的—手段〉、あるいは〈原因—結果〉の関係で結びつけられる。世界の誰とも、なにものとも独立しているものなど、なにひとつ存在しない。いつの瞬間にも、君という存在の相関者がどこかに存在しているし、君自身も、どこかの誰かに作用を及ぼしている。仏教では、この壮大なネットワークを〈縁起的世界〉と呼ぶ。このような世界観を背景にすると、存在者は、それぞれの因果的な作用によって特徴づけられる。だから、講義を聞いている君、居眠りしている君、食事をしている君は、それぞれ別の存在者ということになる。作用が異なれば、存在も異なる。これが、ダルマキールティ流の〈存在〉の捉え方だ。

では、そのような存在者が「瞬間的である」のはなぜなのか。この推論式の大前提はどのようにして確認されるのか。この点について、ダルマキールティは、この命題の対偶となる「瞬間的ではないもの(二刹那以上持続するもの)は存在しない(因果的な作用をなすことはできない)」を証明することで疑問に答えているのだけど、その詳細は、また別の機会に論じることしよう。

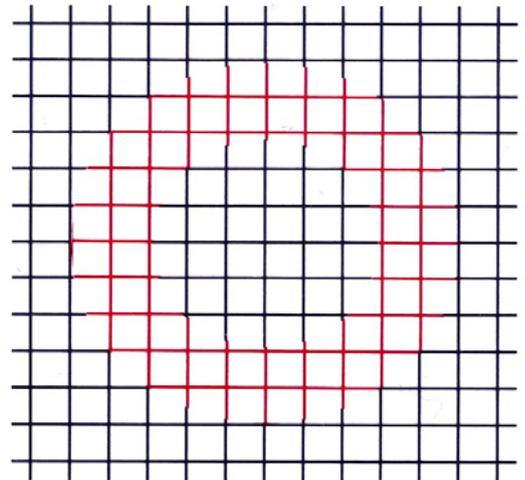
とりあえずは以上で、インド哲学の思考法の一端は、感じ取れたのではないだろうか。あ、言い忘れたけど、この私の理解もまた「無常」であるには違いないよ。あとは君たちが新しい理解を生成していくことだ。そう、心を集中し、努力して。それがブッダが教えた〈哲学〉なのだから。

おすすめ図書 谷貞志『〈無常〉の哲学 ダルマキールティと刹那滅』(春秋社)
桂紹隆『インド人の論理学』(中公新書)
竹村牧男『入門 哲学としての仏教』(講談社現代新書)

●第2講…あなたの見ている景色はどこにある？

篠原 成彦 [言語哲学／心の哲学]

右の格子模様の中に、ふわっとピンク色に光る輪っかが見えるかな？ 人によって見えないこともある。そこで、とりあえず見える人に尋ねるんだけど、ここにピンクの輪っかが本当にあるのだろうか？ 格子の赤い線を一部分だけ黒色のペンで黒い線に変えてみてほしい。…どう、わかった？ この図の中には、赤い線はあったけど、ピンク色の面は無かったんだ。つまり、あなたに見える（今では一部の欠けた）ピンクの輪っかは、このページ上には無い。じゃあ、どこにあるんだろう？ あなたの頭の中？ うん、そう言いたくなるよね。このページ上に輪っかが無い以上、それがあなたに見えてしまうのは、たしかにあなたの脳（視覚システム）のしわざだ。

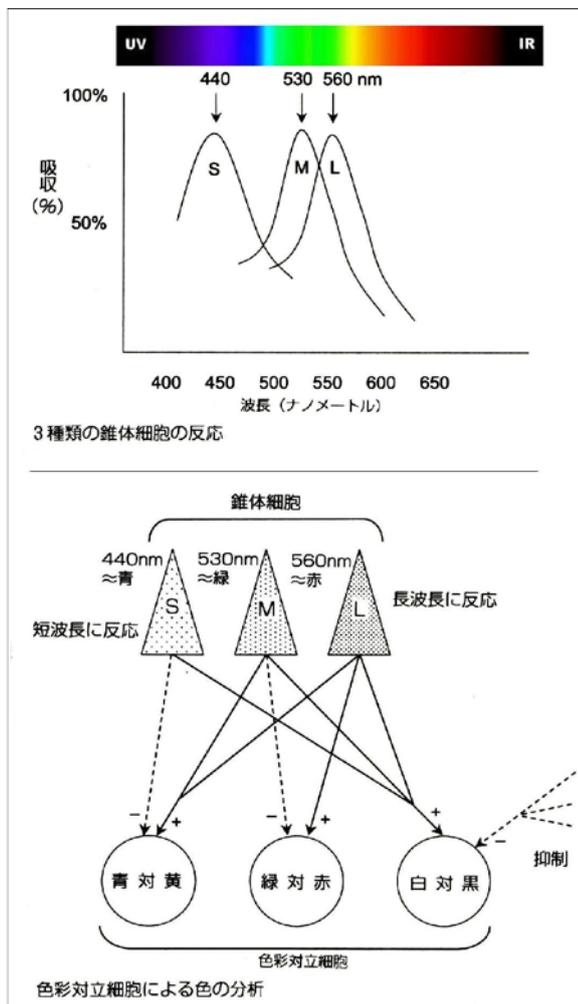


デネット著／山口監訳『解明される意識』より

でも注意してほしい、これは、文字どおりの意味であなたの頭の中にピンクに光る輪っかがあるということじゃない。あなたの頭の中にあるのは、むしろ、ぷるぷるしたあの灰白色の物体だけだ。じゃあ、ピンクの輪っかなんて実はどこにも無いだろうか？ こんなに生々しく見えてるのに？

同様のことが、実は、あなたの見るあらゆる景色（光景）についてもいえてしまう。これはちょっとややこしい話だからゆっくり説明しよう。

たとえば「真っ赤なリンゴ」なんていうけど、その赤さはリンゴの表面そのものが持つ性質じゃない。さ



まざまな波長の光からなる太陽光を受けると、熟れたリンゴは比較的短い波長域の光をよく吸収し、他をよく反射する。そして、この反射光が網膜に届くと、人間の9割強において、S、M、Lと3種類ある錐体細胞が、波長に対する固有の感度で反応する。この反応を発端とする刺激が、絶妙な変換・合成を受けながら脳神経網をリレーされていった結果として、あなたは「このリンゴ、真っ赤だね」なんて言ったりするんだ（左のグラフと図、さらに末尾の[補注]を参照）。これは、あなたにどんなものが見えるかを決定するのは、実質的にはあなたが眼を向けている対象でもそこからの反射光でもなく、あなたの脳神経の反応パターンだ、ということにほかならない。なぜなら、リンゴや光が無い状態でも、人為的に脳神経の反応パターンを熟れたリンゴを見てるときと同じにできたとしたら、やっぱりあなたには真っ赤なリンゴの姿が見えてしまうはずだから。

では、ここであらためて周囲の景色を眺めてほしい。いろんな色が見えるね。そう、あなたの見る景色は、いろんな色が隣り合うことで構成されている。じゃあ、そのいろんな色は、つまりあなたの見ている景

色は、いったいどこにあるんだろう？ 色覚のメカニズムからして、あなたの目の前(顔の前方)じゃない。そして、さっきのピンクの輪っかの場合と同様、あなたの頭の中にあるのでもない。じゃあ、あなたの見ている景色はどこにも無いんだろうか？ そんなに生々しく見えているのに？

音についても同様のことがいえる。たとえば「鐘が鳴る」っていうけど、お寺の境内で打たれた鐘はただ周囲の空気に振動を与えているだけであって、その振動に鼓膜を出発点とする聴覚システムが反応した結果として、われわれは「鐘が鳴ってるねえ」なんてしみり言ったりするわけだ。さて、じゃあ、鐘の音はどこで鳴ってるんだろう？ お寺の境内じゃない。あなたの頭の中でもない。だとしたら、鐘の音なんて実はどこにも生じてないんだろうか？ あんなに生々しく聞こえるのに？

こうした一連の問いを突きつけられた人は、しばしば、「色や音は、要するにわれわれの意識に現れるものなんだ！」という答えに飛びつく。でも、こんな答え方をする人に対しては、「じゃあ、その意識ってやつはどこにあるの？」というさらなる問いが待ちかまえている。こう問われると、たいていの人は自分の頭を指さすぐらいのことしかできない。これじゃダメだ。だって、これは結局、色や音はわれわれの頭の中に現れる、と言ってるのと同じだから。もうちょっとマシなのは、「私が体験する色や音は、空間的な位置を持たない特別な仕方 で存在(出現)するんだ」っていう答え方だろう。意外かもしれないけど、空間的な位置を持たない何かについて人々が(しばしば無自覚に)その存在を認めるのは、そう珍しいことじゃない。たとえば数がそうだ。(√2はどこに存在する？ 1と2の間？ じゃあ、1と2は？ そして実数の全体は？) ほかに、言葉の意味とか、いろんな規則(交通規則、野球や将棋のルールその他)とか、あと、神さまとかね(村の守り神は村のどこかにいるかもしれないけど、時空を創造した神さまがいるとしたら、その存在に空間は要らないはずだ)。だけどももちろん、珍しくない考え方だってことは、それが正しいってことじゃない。むしろ、この種の考え方は全て間違いなのかもしれないよ。

色って何なんだ？ 音って何なんだ？ いったいどこにあるんだ？ いや、そもそもあるのか？ あるとすれば、いったいどういう仕方であるんだ？ ——こうした一連の問いに対する解答を探っている哲学者は、けっこう多い。大物もいるし小物もいる。私もそんな中の一人だ(小物だけだね)。で、私としては、色や音なんて結局は存在しないんだけど、幸か不幸かわれわれは、色や音がどーんと存在するという実感から逃れられないようにできちゃってる、という説明の方向を狙ってる。おっと、狙ってるんであって、これでいけるという確信があるわけじゃない。行き詰まったら別の可能性を探るまでのことさ。…って、軽薄？ いやいや、学問的探究とは、まさにはこういう姿勢でやるもんだ。

[補注] われわれの中には3種類の錐体細胞のうちどれかを持たない人たちもいる。こうした少数派——といっても、かなり多いんだよ——に対して、たとえば「彼らは緑のものと赤いものを区別できない」なんて言う人がいるけど、これは自分の無知を暴露しているようなものだ。なぜなら、われわれを取り巻く環境そのものに色があるんじゃないかと、われわれの脳神経が、眼に届く光の波長とその他の条件——そう、さっきのピンクの輪でも分かるように、色の見え方は光の波長以外の要因でも変わってくる——に応じて、それぞれの仕方 で景色をいわば塗り分けている、というのが実情なんだから。実際、持ってる錐体細胞が2種類だっていうのは、人間では少数派だけど哺乳類では多数派だ。逆に、鳥類の多くは錐体細胞を4種類も持っていて、どうやら紫外線のあたりまで見えている。ヒトという一動物種の多数派がたまたま持ってるにすぎない景色の塗り分け方を、環境の正しい捉え方だと思ふなんて、全くの間違いというほかないんだよ。

おすすめ図書 金杉武司『心の哲学入門』(勁草書房)

P.S.チャーチランド／村松太郎訳『ブレインワイズ:脳に映る哲学』(創造出版)

D.C.デネット／山口泰司監訳『解明される意識』(青土社)

何回しつこく言っても学生がウケてくれない私の持ちネタに「昔の日本人がく世界の中心で愛を叫ぼうと思ったら、中国に行かなきゃならなかったんだよ」というものがある。ウケないどころか、ある時には「先生は、そういうことを本気で言っているのですか？」と質問(詰問?)されたことさえあった。

もちろん本気である。西の方から南の海を渡って野蛮な方たち(原語を直訳したら、こうなりました。悪しからず)が大挙してやってくるまでは、それがこの界限では「常識」だったからである。もちろん、「常識」は所詮「常識」に過ぎない。ただ、昔の人たちの想念の中では、そういう世界認識はそれなりにリアリティ(つい「野蛮な方たち」の表現を使ってしまった…)を有していたと思われるし、私としては、そういう想念を可能な限り追体験したいと考えている。歴史の積み重ねの果てにいる今の自分が、どこに立ってどういう角度からこの世界を眺めているのかを、冷静に見据えるためにも。

私の研究の動機は、煎じ詰めればこんなところだ。以前、「骨董屋みたいなことをやっている」と揶揄されたことがあるが、それは、私にとっては逆に過分の褒め言葉だ。移りゆく時代の流れに惑わされることなく物事の本質を洞察する力量をもっている人——思うに、そういう人こそが、真の骨董屋さんなのだろうから。そういう人に私はなりたい。

ところで、その「世界の中心」で、「愛」はどうやって語られていたのだろうか？すぐに思い浮かぶのは、孔子の「仁」の思想である。「仁」とは何かという問題は、孔子自身がきちんと定義していないので難しいのだが、南宋の思想家・朱熹[1130-1200]が、この「仁」について非常に緻密な、そして独特な議論を展開しているのだから、そちらを見てみよう。

朱熹の考えは、こうだ。——天地は、<万物を生み育む心>を自らの心としている。そして、生きとし生けるものもまた、この天地の<万物を生み育む心>を自らの心としている。春になると、草木が芽生える。その芽生えは、春の芽生えであると同時に、夏・秋・冬というめぐり行きそれぞれの芽生えでもある。このような具合に、全ての存在には、天地の<万物を生み育む心>が貫徹しているのであり、それがつまり「仁」である。

一つ気をつけなければならない点は、「仁」イコール「愛」ではないことだ。「仁」は天から人に賦与された道理、ひらたく言うと天性のことで、「愛」はその天性が現実作用・発現した感情レベルの状態を指す。一言でいえば、「仁」は「愛の理」である。——

朱熹はどうしてこんな理屈っぽい説明をしたのだろうか？簡単に言えば、彼は許せなかったのである。「仁」を非常に観念的に解釈して「僕たち、みーんな一体なんだよ！」と妙にキラキラする目で語ったりする連中(「仁=物我一体」論者)も、その逆に、「仁」を非常に具体的な「感覚」のレベルに限定して「結局さあ、ビビビってくるこの感じが全てっしょ！」としたり顔で述べたりする連中(「仁=知覚」論者)も。そういう両極端の連中(あなたの周りにもいませんか?)を両脇に見据えつつ、彼は中庸の道を選ぼうとした。——世界は確かに愛に満ちている。でもそれは、単なる観念でも単なる感覚でもない。われわれ一人一人が天からひとしく享受している、生き生きとしていて秩序ある、道理に貫かれた愛が、つまり「仁」が世界に満ちているんだ——朱熹が良かったことは、結局こんなところだろう。有名な「性善説」という学説も、こういう話の流れのなかで理解する必要がある。

さて、「仁」とよく似た言葉に「恕(じょ)」がある。「恕」とは「思いやり」という意味。水戸黄門の印籠みたいな、誰も逆らえない言葉だ。朱熹も「恕」を重視しないわけではないが、「仁」とは明確に区別

すべきと考え、「仁」よりも一等低い位置を「恕」に与えている。その理屈は、こうだ。——「恕＝思いやり」という行為は、「自分は、こういうことをされたら嬉しい／嫌だ。相手も恐らく同じだろう。だから、こういうことをしよう／すまい。」という推測・想像によって成り立っている(恕＝「己を推して人に及ぼす」)。そこには、「自然さ」が欠けている。それに対して、「仁」は、天地の心が自然とこの世界にあふれているように、何の思慮・作為もまじえることなく愛となって溢れ出すものである(仁＝「己を以て人に及ぼす」)。われわれは、「仁」そのものでありきることが理想である。

いま「ありきる」と書いた。「なりきる」とは違う。われわれは本来、天の道理を完全な形でひとしく享受している。これから「なる」のではない。本来そうである。「誠は天の道なり。これを誠にするは人



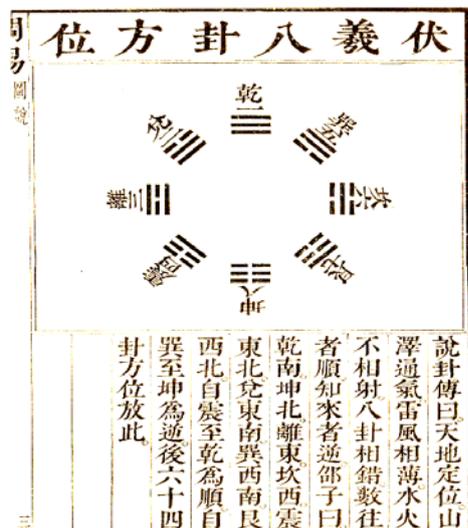
孔子廟

の道なり」(『中庸』)というように、人の為すべきことは、本来の自分を取り戻すことに尽きる。その自己回復のプロセスでは、「恕」「これを誠にする」ような意識的な努力も必要であろう。しかし、そのプロセスの果てに、われわれが嘘偽りのない本来の自分でありきる(「誠」)とき、「仁」という名の愛の道理は、世界に向けて自然と溢れ出すだろう。天地が何の気負いもなく、ごく自然と万物を生み育むように。

こんなことを臆面もなく語る朱熹に、私は大学2年の時に出会った。(これも半ば「持ちネタ」化しつつある話だが)それは、私が高校時代から付き合っていた彼女に捨てられた年だ。別にいまだに未練があつて、こういう話をしているのではない(信じてください)。「世界の中心」を見失ったこの時に、自分のテツガクの道が始まったと思えばこそその話である。

それと、確かにその当時は真剣に考えた。……「己を推して」彼女に及ぼしたら、彼女はオレのこと好きはずなのに、何故?! 「誠は天の道」って言うけど、彼女に捨てられたオレの「誠」って、一体なんなのさ?! 「自然」であることって、そんなに大切なのかな? いま、ありのままの自然な状態になったら、オレ何しでかすか分かんないよ! ……こうやって書いてみて、自分はその頃から何一つ進歩していないことに気付く。ちょっと悲しい。

みなさん、どう思います? 世界は愛に満ちているんでしょうか?



おすすめ図書 加藤徹『漢文力』(中公文庫)

加島祥造『タオ 老子』(ちくま文庫)

佐藤仁『中国の人と思想8 朱子』(集英社)

島田虔次『朱子学と陽明学』(岩波新書)

ひとつ、自虐的な質問から始めさせてください。おそらく、この授業に出席することはあなたの人生にとってそれほど重要なことではないでしょう。だとしたら、あなたはなぜおとなしくこの場に座って私の話を聞こうとしているのでしょうか。なぜ立ち上がって「つまらない、もっと大事な用事があるので帰ります」と言い残し、颯爽と教室のドアから退出していかないのでしょうか？

答えはわかりきってる。つまらないことを訊かないでくれ。そんな声が聞こえてきそうです。この授業に関する《単位》や《成績》を操作するのは教員でしょう。黒板に向かって座ってる人間が、黒板を背にしてしゃべってる人間に刃向かって損するだけじゃないですか。それに、くだらないパフォーマンスをやって仲間から浮いちゃうのもゴメンだし……。こんなふうには、私たちのほとんどは、世の中の慣習とか掟に従いつつ、善良な市民として平穩無事な毎日を過ごしています。

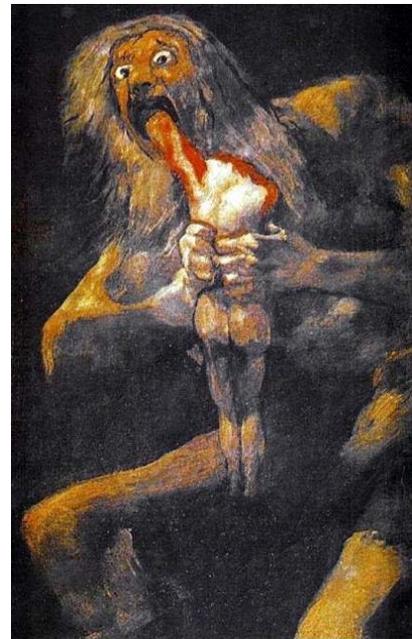
それにしても二、二が四とは、実に鼻持ちならない奴だ。…偉そうに恰好をつけて、腰に手を当てて人の行く手に立ちはだかり、頭から人を蔑んでいるじゃないか。二、二が四が実に申し分のない結構なものであることは認めるよ。でもなにからなまでに誉めるといふなら、二、二が五だっけときにはそれは可愛らしいものだと言えるんじゃないか？ それにいったいどうして、正常でポジティブなものだけが、つまり平穩無事な幸福だけが人間にとって有利なものだと、あんた方はそれほど断固として勝ち誇ったように言い切ることができるのだ？

(『地下室の手記』)

ドストエフスキーの小説、『地下室の手記』の主人公は怒っています。「二二が五」を認めない世のなかに対して。そして、「世の慣習に従うのが正しい生き方だ」と断言し、その枠から外れた人間を平気で軽蔑する善人たちに対して。彼はこうもいいます。平穩無事な人生なんてのは愚か者のやることだ。勇気のない奴らが臆病さを思慮分別と勘違いして、それで己を欺き、慰めているだけのことだ。奴らの人生より、世の中の底辺でのた打ち回っている俺のほうがよっぽど《生きている》ことになるのだ、と。

地下室の住人は負け犬です。みじめで、卑屈で、きたならしく、そのくせ自意識過剰でプライドだけは高い。どうやったら人から嫌われ、憎まれ、つまはじきにされるしかない人間です。正直、私は彼の不快な生き方に共感することができないし、ましてや、《そこに重みある生があるから》というだけの理由で、彼のような三文文士のアウトサイダーにエールを送ろうとも思わない……。

「無頼を気取って颯爽と教室を飛び出すような生き方は、僕にはできないだろう。それを思慮分別と呼ばず、《臆病な生き方だ》と罵りたいなら罵ればいい。だけど、退屈をかみ殺しつつ、黙って教室に座り続ける態度にも、それなりに理由があるんだ。地下室の住人の歯ぎしりなんて遠い世界の他人事さ。ルールを外れて突っ走りたがるバカもいるだろうけれど、ぼくはそんなタイプじゃない——」。たぶん、これが私の偽らざる感想になるだろうと思います。しかし、このことは、地下室の住人の憎悪にみちた絶叫の中に、われわれが聞き取るべき「真理」はみじんも含まれていない、ということと同時に意味しているのでしょうか。



ゴヤ、わが子を食うサウルヌス



黒澤明, 『生きる』より

昔…論理学でこんな三段論法の例を習った——
「カイウスは人間である。人間はいつか死ぬ。したがってカイウスはいつか死ぬ」。彼[イワン・イリイチ]には生涯この三段論法が、カイウスに関する限り正しいものと思えたのだが、自分に関してはどうしてもそう思えなかった…カイウスは間違いなくいつか死ぬし、死ぬのが正しい。しかしこの私…ありとあらゆる感情と思考をもったこの私は、まったく事情が別だ。だって私が死ななくてはならないなんて、ありえないじゃないか。それはあまりにも非道なことだ——。(『イワン・イリイチの死』)

トルストイの小説から一節を引いてみました(黒澤明監督、『生きる』の原作です)。独白を行うイワン・イリイチは、ちょっとした事故が原因で内臓に傷を負い、人生の終わりを目前にしています。彼は、「地下室の住人」のように卑劣で反社会的ではなく、善良で、真っ当な役人として人生を歩んできました。イワン・イリイチは、二二が四や三段論法の正しさにいらだつ病的な人間ではなく、「私たち」の側に属する常識に富んだ人物なのです。しかし——。

三段論法の正しさに当惑するイワン・イリイチの叫び声は、じつは、二二が四を憎悪する地下室の住人と同型の問題をつきつけているのではないかと私は考えています。

西田幾多郎は、『善の研究』に付された序文のなかでこう述べました。「日麗に花薫り鳥歌い蝶舞う春の牧場」をみるには「色もなく音もなき自然科学的な夜の見方」と「ありの儘が真である昼の見方」があるが、自分の根本的立場を構成しているのは後者である、と。これは、西田に強い影響を与えたウィリアム・ジェイムズという言葉、「人生は混乱し、あふれかえっているものであり、…たとえ論理的な厳密さや形式上の純粹さを多少犠牲にしても、より多くの生の実感がこめられているような哲学が必要なのだ」に通底します。

西田をなぞりつつ、二二が四やカイウスの視点から「誰にとっても正しい」生き方や死のあり方を平然と論じるのが「夜の見方」、おぞましい現実へのたうちまわる地下生活者や他ならぬ私の死に絶望するイワン・イリイチの視点が「昼の見方」を代表する、ということができるでしょう。また、ジェイムズに従い、地下生活者の呪いやイワン・イリイチの嘆きを、論理的誤りや理不尽な願いとして切り捨てるのではなく、ありの儘の真実の表明として正面から受け止めてみせるのが「より多くの生の実感」に寄り添う哲学なのだ、ということができるかもしれません。

しかし、そのような昼の見方、光彩と陰影にあふれる生の実相を写しだすビジョンはいかにすれば可能なのか。論理学や数学、さらには正しい行為だけに焦点を合わせる法学などには扱えない「生の実感」を捉えるにはどのような存在論や認識論が必要とされるのか。このような問いにひっかかったことが、私が哲学という学問分野に足を踏み入れるきっかけであったように思います。

おすすめ図書 ドストエフスキー, 『地下室の手記』, 光文社古典新訳文庫.
トルストイ, 『イワン・イリイチの死』, 光文社古典新訳文庫.
ウィリアム・ジェイムズ, 『純粹経験の哲学』, 岩波文庫.